

新時代の中国語教育

Chinese Education for a New Age

相 原 茂
AIHARA Shigeru

中国語教育に限らないが、いまや「新しい」という語は実質的な意味をもっている。すなわち IT 革命の進展により、新しいハードウェアは、それにふさわしい新しいコンテンツを求めている。教育や研究に従事するものは、意識の変革が必要とされる。国民の半数近くが大学に入学する時代、これからの外国語教育が担う任務のゆずれない一点は「学生のコミュニケーション能力の養成」になる。しかし、それは単にことばの発信と受信を意味しない。特に中国語においては今後コミュニケーションの文法を解明し、異文化理解を深めることが求められる。本論では二三のケースを取り上げるが、このような視点が重要度をますことは疑いない。

0 . はじめに

私は1997年に NHK のテレビ中国語会話の講師を担当する機会を得た。それ以前に、実はラジオの講師を数年勤めていた。ラジオとテレビ、同じようなものと考えていたが、そうではなかった。

テレビというメディアは映像が不可欠である。この映像を用意するという点でラジオと決定的に異なる。例えば中国への旅行をスキットでとりあげた。まずは機内での会話をとおもった。飛行機の中からスキットをはじめたのだが、機内の椅子は特別、窓も特別、それは大変なことになった。

飛行場については、ホテルにゆくまでの足の確保、つまりタクシーに乗り込んで、宿泊先のホテルを告げる会話を欠かせない。そういうシナリオを書いたら、その撮影当日スタジオに入っておどろいた。タクシーを1台ちゃんと用意してあるではないか。しかも、車の横には“出租汽车”(タクシー)と中国語で丁寧に描いてあった。

テレビではスキットといって、簡単なドラマを見せる。それを撮影する中国口ケのときもそうだ。変化の激しい上海を見せようと、高架道路を疾走する車、さらに高層ビル群を画面に入れたいと思った。そうしたら、その撮影のため、あるビルの屋上にカメラを据え付けることになり、その交渉が大変だったと聞いた。

以来、私はなんの変哲もないショットをテレビでも映画でも写真でも見かけるたびに、ああこれは高いところにカメラを据えたとか、これはヘリを飛ばしたとか、クレーンを用意したとか、これまでとは違った理解をしめすようになった。

ラジオとテレビ、異なるメディアは異なる制作姿勢を必要とする。

1. 「新しい」の意味

私の今日の話のテーマは「新時代の中国語教育」ということだが、中国語に限らず外国語教育はいま新しい時代をむかえている。

「新しい」という語は単なる形容ではなく実質的な意味をもつ。それは、技術情報革命の進展によって、これまでとは違うハードやインフラが出現し、それが真に新しい教授法や教授内容を要求するようになってきているということである。

例えば、教室で授業をしているときでもそうだ。学生のあるものは電子辞書なるものを持っている。教師は情報の量では辞書に勝てない。さらに百科事典が入っているような電子辞書もある。森羅万象、あっという間に情報を引き出すことができる。かつて教師が誇っていた、情報量や情報のありかを知っていることは、もはや何の優位性ももたらしてくれない。

さらにはインターネットの普及がある。情報獲得のツールとして活用することにおいて、教員はもはや学生より劣ることが珍しくない。これまでとは違う、あるいはこれまで通りではゆかない何かが生まれている、それを社会全体が感じており、教育もその例に漏れない。

いま、誰もが意識的に学習したり、そのために努力しなければならないと感じている。また事実それを強いる何かがある。折しも構造改革の波は大学という、世間の外にあって泰平を享受してきたところをも洗っている。

2. ハードがコンテンツを変える

ITの進展は、これまで以上の多くのコンテンツを要求するが、それに従来の紙ベースのコンテンツをそのまま当てるわけにはゆかない。少なくとも、紙ベースで最適であったコンテンツの並べ方や見せ方が、例えばe-ラーニングやCD-ROMなどでもベストであるとは限らない。

これまでの紙ではできなかったこと。つまり即時即場音声、動く映像、クリックすることによる情報の展開と深化。こういった特性をよく理解し、何ができるかを考え、それに対応したコンテンツを設計する必要が生まれている。教員は教材作成において、意識の変革を迫られている。

考えてみれば、昔、教科書などで中国語の部分をちょっとこすると音ができる、そんな教材は

できないものかと、編集者に冗談を言ったことがあった。それが今ではパソコンの画面で実現されている。ある単語なりフレーズなりをクリックすれば音声を聴くことが可能になった。われわれと同世代の出版社の編集者なども、意識改革に苦しんでいるのが現状だ。彼らも昔ながらの編集意識から脱却できない。

現在、私は来年度向けの教材として、アニメによる入門教科書を編集している。これまでビデオによる教材は作ったことがあるが、アニメは初めてである。おそらく日本でも初めてだろう。アニメが安価に制作可能になった背景にはモーショキャプチャーなどの技術の進展がある。アニメは動く漫画である。漫画であるから現実の動きにしばられない。簡単にビルの上から飛び下りたり、別の動物に変身したりが自由だ。そういう特性に基づいて面白いものがないかと模索している。

3. アイデアの保護

これまではコツとか、ちょっとした教え方ぐらいのとらえかたをされていたものが、今後は知的所有権の対象になる「教授システム」に化す可能性がある。なぜなら教授ソフトとして展開され、ベストのものが市場を独占することになると、そこに含まれている教授システムは保護されることになるからである。

卑近な例だが、私はかつて中国語の文法や発音に関する規則を五七五の俳句の形式を使って教えたことがある。それを見た編集者が早速、「先生、あれを『中国語文法奥の細道』として出しましょう」と提案してくれた。

確かに俳句形式は口調がよく、記憶しやすい。例えば次のようなものである。

中国語 飾りは前に 補語後ろ

形容詞 きのうのことでも “了” は要らぬ

“把” 構文 動詞一つじゃ もの足りぬ

発音に関するものもある。

i、n に はさまれ何も 言えぬ a よ （「ian 言」の発音）

n、ng 人參と人生ほどの 違いかな （rénshēn と rénsēng）

母さんと 居ればはっきり e 調子

最後のものは、複母音における e の発音が単独の場合と異なることを言ったものである。e が「母さん」つまり他の母音と一緒にいるときは「エ」のようなはっきりした音に読む。

現在、私の周辺でもちょっとしたコツやアイデアに基づいて教材編集をしている仲間がいるが、昔ならどうということもないことが、このごろだとパソコンソフトという形で提供されたり、将来そういう形になることを見越して「式」などという商標をつけることが普通になってきた。この傾向はますます強くなるだろう。

4. 研究と教育と

大学の教師は実に多面的な働きを期待されている。研究者として、学者として「新しい知の発見」に取り組む。教師として毎日のように学生に授業を行う。行政官として学内のいろいろな会議に出席する。さらに社会や地域に対して講演や書物、記事という形で貢献する。これだけの役割を、それぞれ均等にそつなくこなせるわけがない。得手、不得手もある。

これまでは、日本の大学教師は教育よりも研究に主観的には重点をおいてきたと言われている。しかし、われわれは新しい知見の探究にはげむと同時に、それをどう伝えるかということにも意を用いなければならない。誰もがすべて一流の研究者としてふさわしい資質を有しているとは思えない。むしろ教育無視の弊害のほうが大きいのではないか。その意味ではまさに「外国語教育のプロフェッショナル養成」が必要とされている。研究と教育は個人の問題でもあり、システムの問題でもある。どちらをメインにすえてやってゆくのか、将来的には選択をすることになるだろう。

しかし、研究「未知の知の探究」をしていないと教師は全人的な魅力に欠けるのではないか。私はあまりよい研究者とは言えないが、それでも単語の使い方についての小さな新知見とか、何でもよいが自分にとってささやかな発見がないと教えることに力が入らない。大学の教員はどこにも書いてないこと、つまり情報として新しいことを教授しうる力を持っていないと何かが萎えてくる。個人的にはそういう感覚をもっている。

学生は何かに夢中にうちこんでいる教師の後ろ姿をみて育つ。

5. 大学の役割

大学の果たす役割も再考を迫られている。

ブロードバンドによる、音声と画像が享受できる環境が生まれ、最良のものが、簡単に体験できる時代では、劣ったものはもちろん、最良のもの以外はいらぬ。研究者についてもそのようになるだろう。流通において中間業者が不要になると同じことが、研究者や教材テキストでも起こってくる。こういう厳しい時代に、他と競争して生き残るには、何をめざすか、他との差異化を考えなければならない。これは大学院教育の根幹にかかわろう。

例えば先日、「キラ星講義」というような企画を耳にした。これは中国語の文法なら文法で日本全国から、特定の分野ごとに、例えば形容詞とか補語とか受け身文とかについて、専門の最良の語り手を選び、その人に講義をしてもらう。各分野のキラ星に登場願う。これをビデオに撮る、配信する。最良の講義ができあがる。あとは要らない、という発想だ。キラ星に選ばれなかった教員はどうするか。

しかし、どんなにすぐれた研究者がいようと、ある学生の面倒をみるのは、目の前にいる特定の先生である。これはどんなに魅力的な異性がTVに登場しようが、グラビアを飾ろうが、あなたのパートナーになるのはそれとは別の、目の前の具体的な1人であるのと似ている。

具体的に1人ひとりの現実に即して学生を指導し、学生の書いた論文について意見を言い、指針を示してくれるのはやはり特定の先生以外にない。

かくてわれわれは、おそらく学生の指導という点において、よりきめ細かい対応をすることになるだろう。社会的にも最近の傾向として、通信教育や独学よりもスクールに通い、具体的な指導をあおぐというスタイルをとる学生が増えている。

しかし、指導不可能になることもありうる。その時は、その学生が去るか、教授が去るかである。ミスマッチは急速に解消されるようになるだろう。大学院等においてはなおさら個人の性向、専攻分野に即した指導が求められよう。そうしてこそ、大学として学生の質を社会的に保障することができる。

わたしはまた中国語の実践的コミュニケーション能力をはかる検定としてTECC (Test of Communicative Chinese = 中国語コミュニケーション能力検定)を開発し、現在実施およびその普及につとめているが、こういう客観的な基準にもとづいて学生の学力を評価し、それを含めて大学が社会にたいして学生の資質を保証するということは、今後ますます必要になってくるだろう。外部の検定により、学生の学力評価を行うということは一種のアウトソーシングである。

インターネットのブロードバンド環境が整うにつれ、日本と中国をむすび、中国の大学院生に教師役をしてもらい、1対1のライブによる会話教育を行うということもビジネスアイデアとして、すでに民間で考えられている。これはTV電話のようなものであるが、そこに体系的な教材を導入し、教師役にそれなりのトレーニングを施せば十分な効果を期待できる。1対1という点では、会話教育のかなり理想に近い形態であろう。これもアウトソーシングとしてとらえることができよう。

非本質的なものを外部に委託したときに、大学がするべきこととして何を残すか。しかも、残されたものは他との差異化をも満たしていなければならない。

6. ゆずれぬ一点

大学全入時代が近い。国民の半分近くが大学に進む時代である。これまで考えられてきた大学教育の崇高なイメージが通用しないのは当然である。こういう時代では、外国語教育では、少なくとも「当該外国語でコミュニケーションが可能」というのが、一つのゆずれない点になるのではないか。その時、単にコミュニケーションに必要なセンテンス、単語を教えれば済むというものではないだろう。

本当に分かるということは、言葉の向こう側まで分かるということだ。「ツーカー」の状態をどうやって作り出してゆくか。本当に分かる人材をつくってゆく、その方法論を模索しなければならない。

言葉の背後にある、日本と中国の思考法のちがい、価値観の違いなどを探究し、これを納得のゆく形で教授する必要が生まれてくる。日中異文化コミュニケーションの文法であり、異文化対応能力を鍛えることである。

これは単に言葉を教えて能事終われりとしてはいけないということだ。

7. 日中異文化コミュニケーション

7.1 具体的な例を二、三とりあげよう

中国では、お客が食べ切れない程料理を出す。家庭でもそうだし、レストランに客を招待した時もそうだ。ホストとしての面子がある。一通り注文して、さらに1、2品高そうなものをつけくわえる。そうしないと中国人は落ち着かない。

それに対してわれわれはどうか。接待する客の前で注文する時でも、「こんなもんでいいかな」などと平気で言う。お店の人だって、

「そうですね。召し上がってみて、足りなかったらまた注文されたらよいでしょう」などとアドバイスしてくれる。考えてみると、これはおかしなセリフだ。「もし足りなかったら」とは、暗に足りない可能性があることを示唆している。中国なら、こんなことを言うのは主人に対して失礼千万である。こういう場に居合わせた中国人は一様に内心びっくりする。

日本は面子よりも、ほどほどを善しとする。

では、中国人には無駄という観念がないのか。もちろんある。ただ、ホストとして振舞うときは、面子のほうが優先される。

「もったいない」という観念は世界共通だ。たとえば、中国でも、どの家にも食事の「お掃除役」がいると聞いたことがある。食事の残り物を片付ける人で、たいていはその家の主婦の役目だ。無駄にしないように残り物をすっきり食べる。だから、もったいないという感覚は中国人も十分もちあわせている。

では「たくさん注文して食べ残す」と「残してはもったいない」、この矛盾をどうするか。その解決法が最近出てきた。“打包”*dǎbāo*(余った料理を包んで持ち帰る)ができるようになってきた。山のように余った料理を前にこういう。

小姐，打包。Xiǎojiě, dǎbāo.(すみません、包んでください)

沢山注文する。これで面子は保たれる。無駄のないように持ち帰る。これで儉約精神も満たされる。かくて、バランスがとれている。

われわれは“打包”はしない文化だ。その場で料理を目で楽しむ。そのぶん、むちゃな注文

もしない。

お互い、これでいい。ただ、日中の文化が接触した時に誤解がおこる。

7.2 人との別れ方

例えば中国人の客が来た。話がすんで「じゃあ」と言って別れる。ここらあたりの呼吸が難しい。会話の本には、こんなやりとりが出ている。

我该走了。Wǒ gāi zǒu le. (帰らなくては)

您慢走。Nín màn zǒu. (お気をつけて)

“慢走”と言うのは客を見送るときの決まり文句だ。「ゆっくり、お帰り下さい」ということで、私もよく使う。

しかしこれは、いよいよ本当に別れる時に言う。もうここから先は見送りませんよということだ。考えようによっては、これを口にしたらあとはそちらで気をつけてください、私は知りませんよという突き放しになる。つまり、“慢走”を口にするタイミングというか、時期が大事なのである。

これは私の反省だが、研究室で客と会い、話が済んで、相手が帰るといって、そうですかではお気をつけてというつもりで、その場ですぐに“慢走”と言ってしまったことがあるような気がする。

相手が留学生ならこれでも許されだろう。だが、中国語には見送られる方が言うセリフとして、

请别送。Qǐng bié sòng. (見送りは結構です)

请留步。Qǐng liú bù. (ここままで見送りは結構です)

という挨拶ことばがある。こういう言葉があるということは、中国では客をしばらく見送る、玄関の外ぐらいまで見送る習慣があるということだ。それが普通の礼儀だ。

私の研究室は4階にある。少なくともエレベーターのあたりまでは見送るべきであった。すると相手も歩きながら、いや結構です。“您忙吧！”(Nín máng ba! どうぞ御自分のことをなさってください) などとってくれる。そこを遮り、いやいやお見送りさせてくださいとお伴する。相手も“请别送”とか“请留步”というセリフを言える。これでこそ中国流だ。

エレベーターのところまで来たら、相手によっては乗り込んで1階まで一緒におりる。さらに校門までゆく。その先是最寄りの駅までゆく。どこで歩を留めるかは、二人の関係による。

なまじ“您慢走。”などという言葉を知っていると、ついつい使いたくなる。口にすると時期をあやまり、えらい失礼なことをしたのではないかと今でも不安だ。

ことばの背後にあるコミュニケーションの文法を教えず、単にフレーズだけを学生に教えていたのではないか。こちらのほうがもっと気がかりだ。

7.3 卑近な別れのあいさつ“再见”

中国人と別れるときだが、日本人はほとんどが“再见！” Zàijiàn! と言っている。もちろん、これで間違いではない。

間違いではないが、“再见！”一本槍というのにも芸がない。中国人がどう言って別れるか観察してみる。

すると、次のような二つのタイプになる。

A 明儿见！（じゃ、また明日）

B 以后再联系。（また連絡するから）

すぐに会えるのなら“明儿见！”とか“后天见！”（あさってまた）と言う。“回头见！”（またあとで）も同じで、これらすべて「時間名詞＋“见”」という構造だ。

「場所名詞＋“见”」もある。“学校见！”（また学校で）とか“东京见！”（東京で）などという。以上はいずれも会う予定がもう決まっているAタイプの場合だ。

とくに会う予定がないならBタイプ、“以后再联系。”ということになる。あるいは、「また電話するよ」でもいい。

回头给你打电话。（あとでまたあなたに電話するよ）

要するに、電話とか手紙とかメールを使って、また連絡するというのである。

結局のところ、中国語では別れに際し、「再び会おう」という。その「再び会う」ことがまだ決まっていなければ、再び会うための連絡をとるぞという。未来に二人の関係をつなげてゆく。そういう姿勢がある。

ちょっと単純化してはいるが、あくまで未来に向けて二人の関係を維持し続けてゆくという点で日本語の「さようなら」とは違うのではないか。

以上、「さようなら」に関わる表現をとりあげたが、このぐらいのことでこれだけ発想が異なるのであれば、他は推して知るべしである。

これで思い出すのは、もののあげ方だ。例えば、中国旅行にゆく。向こうのガイドさんにお世話になった。別れに際し、ちょっとした記念のものを感謝の気持ちを込めてあげる。そのガイドさんとはおそらくもう二度と会わないだろう。でもいつまでも思い出としてお互いが記憶に留めたい、そんな思いも込めて私たちはモノをあげる。

中国人の感覚では、こういうふうにもノをあげるということは、将来に渡ってこれからも関係を維持したいというシグナルだと感ずる。単に感傷的なお礼としてはモノはあげない。

御歳暮だってそうだ。日本は「お世話になったあの方に」あげるが、中国は「お世話になるあの方に」あげる。中国は未来指向である。

ことばを教えながら、ことばの背後にあり、それを支えている「行動の文法」を教える。中国語ではこういう視点はこれからのものだ。